

地域研修報告書

2015



1 ……『地域研修報告書』の発行にあたって

1 ……地域研修ガイダンス

2 ……地域研修1年間の流れ・研修地一覧

4 ……地域研修報告会

6～24 ……地域研修ゼミ報告（2015年度 地域研修Ⅰ・Ⅱ 参加19ゼミ 計296名）

6 浅妻ゼミⅠ
一般廃棄物処理行政に関する地域間比較
研修地／石狩市・富良野市・中札内村



7 大貝ゼミⅠ
温泉地の観光資源発掘と連携による地域の活性化
研修地／登別市



8 大貝ゼミⅡ
「いなか」の魅力を探る
研修地／高知県津野町・四万十町・中土佐町



9 奥田ゼミⅠ・Ⅱ
歴史と観光のまち小樽の研究
研修地／小樽市



10 川村ゼミⅠ・Ⅱ
学生アルバイトをめぐる問題
研修地／札幌市



11 小坂ゼミⅠ・Ⅱ
地層処分研究とメガソーラー
研修地／幌延町・稚内市



12 佐藤ゼミⅠ
室蘭市のまちづくりの特徴を調べる
研修地／室蘭市



13 佐藤ゼミⅡ
旭川市における大型小売店の出店と買物公園
研修地／旭川市



14 徐ゼミⅠ・Ⅱ
外国人観光客誘致の実態調査：上川町・層雲峡温泉
研修地／上川町



15 中園ゼミⅠ・Ⅱ
母子家庭の現状と子どもの教育・学校外活動について
研修地／札幌市・日高町



16 西村ゼミⅠ・Ⅱ
世界自然遺産登録10年の知床・羅臼の現状と課題
研修地／羅臼町



17 平野ゼミⅠ・Ⅱ
名古屋市フェアトレードタウン宣言の過程とその可能性
研修地／愛知県名古屋市



18 古林ゼミⅠ
サケ漁業と地域HACCPの取組
研修地／標津町



19 古林ゼミⅡ
日高地方における軽種馬の生産・育成・流通
研修地／浦河町・新ひだか町・様似町・日高町



20 水野ゼミⅠ・Ⅱ
朝鮮人強制労働の痕跡を訪ねる研修
研修地／幌加内町朱鞠内



21 水野谷ゼミⅠ
観光まちづくりの可能性と課題
研修地／浜中町



22 宮入ゼミⅠ・Ⅱ
十勝から北海道農業の未来を考える
研修地／芽室町・帯広市・音更町・中札内村



23 山田ゼミⅠ
美瑛町の観光の検証
研修地／美瑛町・富良野市



24 山田ゼミⅡ
小さな街の観光ブランド力の背景を探る
研修地／大分県由布市



25 ……現地報告・発表 [西村ゼミⅠ・Ⅱ、佐藤ゼミⅡ]

2015年度

『地域研修報告書』の発行にあたって

北海学園大学経済学部長

佐藤 信



「地域研修」は2003年の地域経済学科開設と同時に始まった科目です。当初は地域経済学科の独自科目として位置づけてきましたが、経済学科でも複数のゼミで実施するようになり、経済学部と地域社会との関わりを深める科目として発展してきました。最近では、地域を対象とした課題解決型科目あるいはフィールドワーク科目として内外で注目される存在ともなっております。

地域研修のテーマも年々多様化し、研修先も北海道内にとどまらず、遠く沖縄まで拡大しております。研修内容も、自治体調査に加えて、住民へのアンケート調査、企業訪問などと広がりを見せており、その成果は、学内での「地域研修報告会」や「地域研修報告書」のほか、研修先での地域報告会を通して還元しております。

地域研修には以下のような意義があると考えます。第一に、1～4年次にわたるゼミ活動にあっては、地域社会の一層の理解のためにはゼミと一体で取り組まれる地域研修が有効であること。第二に、地域研修の実施においては、学生たちの相互協力による準備、研修先における苦労や喜びの共有、これらを通じた学生たちの成長が期待できること。第三に、成果報告のためのプレゼンテーション資料や報告書の作成は、単なる既存資料の利用にとどまらずに、学術的にも価値のあるオリジナルな成果をもたらす可能性を有していること等が挙げられます。

今後、「地域研修」の一層の充実のため、より長期にわたる地域研修の実施や2部カリキュラムへの導入等の検討をすすめているところです。

地域研修の実施にあたっては、何よりも、地域住民や自治体、企業・団体など多くの方々のご協力をいただいております。皆さまのご協力に対して、ここにあらためて厚く御礼を申し上げます。

地域研修ガイダンス

2015年4月11日 50番教室



地域研修1年間の流れ

地域研修は夏休みに行われる現地研修（フィールドワーク）が中心ですが、そのためには事前の学習、研修後にその成果をレポートにまとめる作業、報告会でのプレゼンテーションまで、これまでの教室での講義・理論の要素に加え、実践的な学びが必要とされる複合的な学習です。

4月 ● 地域研修ガイダンス

地域研修担当教員から当該年度の地域研修に関するガイダンスを受けます。

5月 ● 事前学習（研修テーマなどの決定）

ゼミ担当教員の指導のもと、ゼミ単位で研修対象地域の社会、経済状況などについて、関連自治体・団体などから提供された資料によって、研究対象地域の概要を勉強します。

8月 ● 地域研修実施

おおむね夏休み後半から10月初旬にかけて現地研修を行います。現地研修では関連自治体・団体・企業などからのヒアリングを行い、関連施設の見学や実地見聞、実態調査などを行って研修内容を深めます。

10月 ● 事後学習

ゼミ担当教員の指導の下、研修成果をまとめます。また予定される地域研修報告会に向けて準備を行います。

12月 ● 地域研修報告会

地域研修の成果に基づいて研修レポートを作成し、ゼミ単位で発表を行い研修成果をゼミ相互で確認しあいます。

3月 ● 地域研修報告書の作成

地域研修報告会の研修レポートをもとに、研修の成果を報告書としてまとめます。



1,2 地域研修ガイダンス。3,4,5,6 事後学習と報告会へ向けての準備。7,8 地域研修報告会でのゼミ発表。

地域研修履修者数と実施ゼミ数

履修者数（人）



ゼミ数



研修地一覧



宗谷総合振興局管内

- A 稚内市 小坂ゼミⅡ
- B 幌延町 小坂ゼミⅡ

上川総合振興局管内

- F 幌加内町 水野ゼミⅡ
- G 旭川市 佐藤ゼミⅡ
- H 上川町 徐ゼミⅡ
- I 美瑛町 山田ゼミⅠ
- J 富良野市 浅妻ゼミⅠ、山田ゼミⅠ

石狩振興局管内

- C 石狩市 浅妻ゼミⅠ

D 札幌市

- 川村ゼミⅡ、中園ゼミⅡ

後志総合振興局管内

- E 小樽市 奥田ゼミⅡ

根室振興局管内

- K 羅臼町 西村ゼミⅡ
 - L 標津町 古林ゼミⅠ
- ## 釧路総合振興局管内
- M 浜中町 水野谷ゼミⅠ

十勝総合振興局管内

- N 芽室町 宮入ゼミⅡ
- O 音更町 宮入ゼミⅡ
- P 帯広市 宮入ゼミⅡ
- Q 中札内村 宮入ゼミⅡ、浅妻ゼミⅠ

日高振興局管内

- R 日高町 中園ゼミⅡ、古林ゼミⅡ
- S 新ひだか町 古林ゼミⅡ
- T 浦河町 古林ゼミⅡ
- U 様似町 古林ゼミⅡ

胆振総合振興局管内

- V 室蘭市 佐藤ゼミⅠ
- W 登別市 大貝ゼミⅠ

津野町 大貝ゼミⅡ

名古屋市 平野ゼミⅡ

中土佐町 大貝ゼミⅡ

四万十町 大貝ゼミⅡ

由布市 山田ゼミⅡ



両日ともに1教室に3～4ゼミが配置され、3つの教室で発表が同時に進行する形式がとられ、報告ゼミ数は20になりました。報告会では、それぞれのゼミが事前学習と現地調査の結果をまとめ、そこから得た成果と課題について発表しました。会場によっては現地調査でお世話になった関係者の方々にご参加いただき、発言していただきました。また、今回は発表にもとづく意見交換をより充実させるために、教員コメンテーター制を導入しました。各教室に2～3人の教員を配置し、各ゼミの発表後に教員から質問や講評を話してもらいました。もちろん、教員からだけでなく、各教室では参加学生からも質問や意見を出してもらいました。教員からは率直な質問や意見が出され、それに対して発表ゼミの学生が答えに苦しむ場面もあれば、補足説明を加えつつ論理的かつ的確に受け答える学生もみられました。学生にとって今回の報告会は、研究成果についてゼミ以外の教員と意見交換できる非常に良い機会になったと実感しました。

◎11月28日 報告ゼミ順序と研修地

- 40番教室 コメンテーター：佐藤先生(司会)、奥田先生、古林先生
 - ①水野谷ゼミ I (浜中町) ③山田ゼミ I (美瑛町ほか)
 - ②西村ゼミ I・II (羅臼町) ④大貝ゼミ I (登別市)
- 50番教室 コメンテーター：水野谷先生(司会)、中園先生
 - ①山田ゼミ II (大分県由布市) ③平野ゼミ I・II (愛知県名古屋)
 - ②水野ゼミ I・II (幌加内町)
- 16番教室 コメンテーター：水野先生(司会)、平野先生
 - ①奥田ゼミ I・II (小樽市) ③古林ゼミ II (新ひだか町ほか)
 - ②大貝ゼミ II (高知県四万十町ほか)

◎12月5日 報告ゼミ順序と研修地

- 40番教室 コメンテーター：川村先生(司会)、小坂先生、山田先生
 - ①古林ゼミ I (標津町) ③佐藤ゼミ II (旭川市)
 - ②宮入ゼミ I・II (芽室町ほか) ④徐ゼミ I・II (上川町)
- 50番教室 コメンテーター：大貝先生(司会)、西村先生、宮入先生
 - ①小坂ゼミ I・II (稚内市ほか) ③佐藤ゼミ I (室蘭市)
 - ②浅妻ゼミ I (富良野市ほか)
- 16番教室 コメンテーター：浅妻先生(司会)、徐先生
 - ①中園ゼミ I (日高町ほか) ③川村ゼミ I・II (札幌市)
 - ②中園ゼミ II (日高町ほか)





浅妻裕ゼミ I

参加学生数 17人



浅妻 裕

経済学科
教授



一般廃棄物処理行政に関する地域間比較

研修地：石狩市・富良野市・中札内村

【 研修目的 】

我々の生活から排出される廃棄物は、廃棄物処理・リサイクルに関する様々な制度の下、市町村がその処理責任を有しているが、各地域の社会的・経済的条件を反映して多様な姿を見せている。処理体制について、そしてその違いが発生する理由について研修を通じて考察した。

研修地・日程

- 9月14日 富良野市役所にて一般廃棄物処理に関するヒアリング
富良野地区環境衛生センター視察
富良野市リサイクルセンター視察
- 9月15日 うめ〜センター美加登視察
中札内村リサイクルセンター視察
中札内村役場にて一般廃棄物処理に関するヒアリング
- 10月29日 石狩市リサイクルプラザ視察
北石狩衛生センター視察

【 総括 】

各市町村では分別排出・収集状況の確認、処理・リサイクル体制や方法に関する調査を行った。分別に関していえば、石狩市は6種、富良野は14種、中札内は20種というように違いがある。分別数の多さは、「混ぜればゴミ、分ければ資源」といったスローガンに見られるように、各地域の環境やリサイクルに関する意識を反映しているという見方もあるが、それだけではない。例えば中札内村では、村民にリサイクルセンターへの直接持ち込みを呼びかけているが、これは都市部に比べてコミュニティが機能しているから可能となっていると見ることができる。また富良野市が「生ごみ」を分別収集しリサイクルしているのは、「観光都市」を目指していたにも関わらず廃棄物処分場でのカラス被害が深刻化したことと、周辺農地での肥料需要があるためである。石狩市では、リサイクルセンターに隣接するシルバー人材センターを活用し、機械化も進めつつ大量の容器包装を分別する体制を整えている。廃棄物発生量が少ない富良野や中札内では周辺自治体と連携し適正処理と効率化を図っている。このように地域ごとの廃棄物処理・リサイクルの違い、その背景について学習を行うことができた。

学生研修記

板谷 侑生

経済学科 2年
札幌稲雲高校出身



和田 梨那

経済学科 2年
北海道尚志学園高校出身



一般廃棄物処理行政の地域間比較

浅妻ゼミIでは今回の地域研修と、研修前後の調査を通して、一般廃棄物処理行政に関する地域間比較を行いました。私たちは経済学的観点から研修先三地域の異なる一般廃棄物処理行政にアプローチをし、三地域がそれぞれの経済的理由により法律の範囲内で、独自の処理ルートでの廃棄物処理を行っているのだと知ることができました。それは例えば地域ごとに違う分別種類数や、一般廃棄物処理に関する広域連合の存在などです。一般的に人口数に比例して分別種類が減少することはデータを見れば明らかになりますが、なぜそうなのか、またそのほかにも市民意識や啓発活動の行いやすさから分別種類数が変わってくるのだと、今回の地域研修での聞き取り調査で知ることができました。

この地域研修は私たちにとって非常に実りあるものとなり、研究テーマである一般廃棄物処理行政の効率化に向けて今後も調査を継続していきます。

地域研修で学んだこと

私たちは二日間の日程で廃棄物処理・運搬の効率化についての調査を行いました。今回の研修では、効率化について十分な資料を集めることはできませんでしたが、地域間比較を行うという形で調査についてまとめました。廃棄物処理や運搬についてはゼミで学ぶまでは常識の範囲しか知らず、地域研修中は新しい知識をたくさん身につけられたと思います。調査した結果、地域住民の方々のゴミの分別に対する意識の高さや人口が少ないことがリサイクル率に大きく関係していること、分別数を増やすだけでは問題は解決しないことなど私たちが予想していたものと異なる点もあり勉強になりました。これからも更に知識を深めていきたいと思っています。

地域研修は自分の興味のある分野の勉強を深めるという意味でとても有意義なものだと思います。しかしそれだけではなく、実際に出向き、自分の目で見て学ぶことも大切なのだと強く感じました。

写真キャプション ① 熱心にメモをとる（富良野市）。② ステーションを調査（富良野市）。③ 生ごみからリサイクルされた堆肥。④ 分別についての説明を受ける（中札内村）。⑤ 最終処分場の底部に向かう。⑥ 中札内村役場にて。⑦ モニタでプラント管理を行う（石狩市）。



大貝健二ゼミ I

参加学生数7人



大貝 健二

地域経済学科
准教授

温泉地の観光資源発掘と連携による地域の活性化

研修地：登別市

【 研修目的 】

「地方創生」が喧伝されるなか、全国の自治体は、近年のインバウンド観光客の増加もあいまって、観光振興による地域経済の活性化の道を模索しており、登別市もその例外ではない。本研修では、インバウンド観光がもたらす地域経済の活性化の可能性を検討した。

研修地・日程

9月1日	移動 登別温泉地の散策（大湯沼、足湯）
9月2日	登別市役所、登別観光協会ヒアリング 登別グランドホテルヒアリング 登別温泉極楽商店会店舗ヒアリング
9月3日	登別全国大学政策フォーラム政策提言発表会

【 総括 】

本研修では、登別市で毎年行われている登別全国大学学生フォーラムへ参加する形式をとった。本研修で明らかになった点は、次のとおりである。

第1に、近年の登別市のインバウンド観光客の増加は著しいということである。登別温泉全体の観光客数のうち、インバウンド観光客が30%程度にも及んでいることが明らかになった。さらに中国本土からの観光客が急増していること等が明らかになった。

第2に、インバウンド観光客は、団体旅行、個人旅行ともに増加していることが明らかになった。団体客の動向は、新千歳～函館を結ぶ経由地として位置づけられているが、今後、北海道新幹線が札幌開通したときには、移動ルートが大きく変わる可能性が懸念されており、登別の魅力向上に対しての取り組みが必要であることが確認できた。

第3に、個人旅行客に関しては、2、3泊を登別でする形態が増えつつある。しかし、登別温泉では、地獄谷の他に観光資源として認知されているものが圧倒的に少ないことが確認できた。今後、地域にあるものをいかにしてつないでいくかが課題になると思われる。

学生研修記

小野 翔大

経済学科3年
藤井学園寒川高校出身

中嶋 泰士

経済学科2年
札幌北陵高校出身

温泉地・登別での地域研修を通じて

私たちは、北海道一の温泉地としての有名な登別市で研修を行いました。2泊3日で行った研修の最終日には、「全国大学政策フォーラム IN 登別」に参加し、政策提言を行いました。研修では主にヒアリング調査を行い行政、企業、住民の方々から、登別の魅力、可能性、課題など、各方面からの意見を聞きました。ヒアリング調査以外にも、大湯沼や足湯に入り登別の自然を体験し、宿泊先のホテルでは登別温泉の目玉である豊富な泉質で体の疲れを癒しました。

ヒアリングを通して私達は温泉以外にも素晴らしい地域資源がたくさんあるのに、登別市内の企業、行政、地域住民の繋がりが弱い為、地域資源を活かしきれていないと感じました。そしてどのような地域資源が有ろうともそれを活かす仕組みが大切なのだ気づかされました。この研修で得た経験を、今後の研究に活かしたいと思います。

登別での地域研修を通じて

私たちは9月1日～3日までの二泊三日で全国大学政策フォーラム in 登別への参加を兼ねて、登別市へ研修に行ってきました。1日目は登別市に到着後、市内視察として温泉街の足湯体験、大湯沼の散策や温泉街以外の名所などを周りました。足湯は体全体が温まり、汗が出てくるほどで温泉のすごさを実感しました。2日目は政策提言に向けてヒアリング調査を行いました。結果、温泉以外にも酪農のあまり盛んではない登別において生乳の低温殺菌という全国でも珍しい加工を行っている企業があるなど、個々では面白い取り組みが行われていました。しかし、登別市内の企業、行政、住民の「つながり」が薄いためにそれらをうまく生かしきれていないように思いました。3日目にはこれらを踏まえて政策提言を行いました。今後、今回の経験を生かしてこそ研修の意味があったと言えると思います。

写真キャプション ① 登別地獄谷での集合写真。
② プレゼン作成風景。③ ヒアリング風景。④ 大黒屋民芸店ヒアリング。⑤ 藤崎わさび園ヒアリング。⑥ 酪農館のプリン。



大貝健二ゼミⅡ

参加学生数 12人



大貝 健二

地域経済学
准教授



「いなか」の魅力を探る

研修地：高知県津野町・四万十町・中土佐町

【 研修目的 】

近年、「田園回帰」ともいわれる現象が広がってきている。なぜ、都市から農村（いなか）への人の移動が起こるのか。また、人が定住する農村（いなか）ではどのような取り組みが行われているのか。それらを明らかにしていくことが、本研修の課題である。

研修地・日程

9月7日	移動 天狗高原にて高知大学、愛媛大学との合同ゼミ
9月8日	合同ゼミ (一社)いなかパイプヒアリング 廃校を活用した宿舎にて移住者へのヒアリング
9月9日	株式会社四万十ドラマヒアリング 四万十町役場 移住促進担当者ヒアリング 広井茶生産組合ヒアリング
9月10日	四万十川を堪能（ラフティング・カヌー体験） ど久礼もんヒアリング

【 総括 】

本研修で明らかになったことは、次のとおりである。第1に、移住者が多い地域では、「小さな経済」が確立されてきていることである。例えば、四万十町では、移住者の生活を成立させるための仕事づくりが積極的に行われている。その代表的な事例として、全国的にも知られている四万十ドラマでは、「ないものはない」をモットーに、道の駅を拠点に、地域にあるものを加工し、デザインでその商品のストーリーを表現することなどによって付加価値を創出し、仕事とお金をまわす仕組みを創り上げてきている。

第2に、移住者受け入れのための仕組みとして、行政と民間が連携をしながら受け皿を担っていることも興味深い。行政の受け皿は、場合によっては後手に回りかねないが、そうはならない体制を構築している。また、長期インターンシップによっていなかで生活すること、働くことの魅力を体験できる仕組みも興味深い。

第3に、学生が出した結論であるが、結局は「ひと」である。地域をどう見るか、何をするのか、熱い思いを持っているのか、意識を共有できるひとが何人いるのか、そうした「ひと」によって、いなかの経済は成り立っていると再認識した次第である。

学生研修記

伊藤 早紀

地域経済学科3年
札幌東高校出身



田中 大輔

地域経済学科3年
札幌光星高校出身



「いなか」を知って純粋に興味を持た

近年の「田園回帰」現象がなぜ起こるのか、U・Iターン者は何を考えているのかを知るために高知県・四万十町に行きました。研修では、四万十町に移住してきた方だけでなく、役場で移住促進に取り組む方や、長期インターンを通して地域のノウハウを伝えている方に加え、地域のあり方について考えている方たちとお話する機会がありました。その誰もが、人や交流の重要性について語っていたのが印象的でした。

高知へ研修に行く前までは、人口減少はどんな地域でも深刻な問題であり、とにかく人を集めることが課題だろうと考えていました。しかし、ヒアリングからは、人との交流を大切に思える人、地域の魅力を心から魅力と思える心が重要だと知りました。

今回の研修は、いろいろな面で自分の視野が広がったように感じさせてくれるいい経験になりました。

田舎で躍動する人たち

文献輪読がきっかけで、田舎とはどういうところなのかと興味を持ち、「田舎を知ろう」というテーマのもと高知県四万十町にてヒアリング調査を実施した。実際に足を運んでみると、そこは四万十川が中心となって町が形成されており、その風景は圧巻だった。そこでは田舎の将来を担う人材を育成するNPO法人や地域の資源を生かして六次産業を行っている企業などが地域の現状に危機感を持ち、常に将来を見据えて行動し、地元住民、Uターン者となつがって地域を活性化しようとする姿が印象的だった。

また、現在、四万十町では名産品である栗の生産から、加工、販売まで至る六次産業化の拡大を目指し、地元住民の雇用創出や一次産業者に利益を還元するような仕組みづくりに取り組んでいる。そのような四万十町の今後の展開に注目していきたい。

写真キャプション ① 高知大・愛媛大との合同ゼミ。② いなかパイプヒアリング。③ 道の駅四万十とおわ。④ 四万十ドラマヒアリング。⑤ 廃校を活用した宿泊場所。⑥ ど久礼もんヒアリング。



奥田仁ゼミ I・II

参加学生数24人



奥田 仁

地域経済学科
教授

歴史と観光のまち小樽の研究

研修地：小樽市

【 研修目的 】

全体テーマのもとでのグループごとのアプローチにより、①観光を中心とした小樽市の経済の課題を認識し、具体的提言を行うこと、②訪問調査を通じて社会人としてのマナーや認識力を身につけること、③調査内容の分析・取りまとめ、④共同活動を通じた学生同士の相互理解を目標とした。

研修地・日程

9月2日	8グループに分かれて訪問聞き取り調査 小樽市役所、オルゴール堂、石の倉等24箇所
9月3日	8グループに分かれて訪問聞き取り調査 ルタオ、大正ガラス館、小樽ワイン等13箇所

【 総括 】

学生は統一テーマの下で3人ずつのグループを作り、それぞれに小テーマを設けて資料収集をおこなうとともに、自分達でアポイントを取って各4～5箇所の訪問聞き取り調査を行った。

8つのグループのテーマは以下のとおり。

A1：小樽の菓子—菓子の継続と発展—、A2：クラフトから発信する小樽市、B1：小樽の水産加工業—伝統と課題、これからの可能性—、B2：気候を生かした小樽市の酒造り—飲酒量が減少する中で—、C1：小樽港の役割と観光—これから必要とされるもの—、C2：守り続けた町並み—歴史的建造物が支える観光とは—、D1：小樽市の空家問題—観光資源を有効活用するために—、D2：小樽市の人口問題—その現状と取組み—

これらの成果を、グループごとにプレゼンテーションを作成するとともに、10ページ程度の論文にまとめ、その中では学生の立場から見た提言を必ず含めることとした。これをゼミと地域研修報告会で発表するとともに、調査対象の企業・団体等に送付しており、励ましやコメントなども頂戴している。

以上を通じて当初掲げた4つの目標はかなりの程度達成できたと考える。

学生研修記

西田 梨紗

地域経済学科2年
立命館慶祥高校出身

天野 寛凱

地域経済学科3年
紋別高校出身

様々な角度から見た小樽

私たち奥田ゼミでは、小樽市へ行きました。8つのグループに分かれてテーマを設定し、それぞれ企業や市役所等を訪問しました。

私たちの班ではテーマを港湾と設定し、フェリーやクルーズ船、荷役作業、そして再開発計画について調査してきました。正直難しいテーマだったかなと思いましたが、訪問先で伺ったお話はとても楽しく、小樽の知らなかった魅力を認識したとともに、これらを街の発展に生かせるような策を考えたいと思うようになりました。

今回の研修は他の班の調査結果と合わせて、私たちに様々な視点で街の発展について考えることができたので、たいへん有意義な経験となりました。

写真キャプション ①②⑤⑥ 小グループによる企業訪問、経営者からの聞き取り調査。③ 酒倉の前で。④ 観光人力車の方からのヒアリング。⑦ 市役所聞き取り調査。

小樽、資源を生かしたまちづくり

調査は3人1グループを組み、それぞれアポイントメントをとり調査を行いました。小樽の工芸品について小樽オルゴール堂や小樽観光について観光協会など8つのグループが異なるテーマで見学・聞き取り調査を行いました。私の班では歴史的建造物から見たまちづくりについて調査を進め、旧日本郵船や旧日本銀行でお話を聞くことと観光客に面白く魅力的に紹介することや海外からの観光に対応していく必要についての話を聞くことができました。

私たちはそれぞれのグループが異なる視点から調査することで今の小樽の問題点や今後につながる小樽の強みを見つけました。小樽市を知ってもらうためにもお酒や風景など小樽というブランド力を強くすることが必要と考えました。実際に小樽を訪れて気づくこともあり忙しくも楽しい研修でした。今後課題について考えたいです。



川村雅則ゼミⅠ・Ⅱ

参加学生数17人



川村 雅則

経済学科
教授



学生アルバイトをめぐる問題

研修地：札幌市

【 研修目的 】

ゼミナールⅠを中心に、今年も北海学園生のアルバイト実態を調査した。厚生労働省も調査を行うなど（「大学生等に対するアルバイトに関する意識等調査」2015年11月9日発表）、この問題への社会的関心が高まりつつある。より詳細な実態調査や問題解決の提起が求められている。

研修地・日程

前期 若者の雇用・労働や労働法に関する学習。
学生アルバイトの聞き取り調査。
労働組合（札幌地域労組、道労連）を講師に招いて学習。

夏期休業 札幌地域労組事務所を訪問して学習。

後期 コンビニバイトで働く学生を対象にアンケート調査を実施。
「学生アルバイト白書2015」のとりまとめ作業。
ゼミⅡは、研究テーマ（「非正規公務員問題」）について学習。インゼミ大会（@新潟大学、12月）に参加して、法政大学のゼミと討論。

写真キャプション ① 今年も札幌地域労組を訪問し学習。② 学習会の後に鈴木一副委員長と記念写真。③ 求人情報誌でコンビニバイトの時給を分析中。④ 出口憲次さん（道労連事務局長）を講師に最賃学習会。⑤ 奨学金問題を街頭で訴えました。⑥ ゼミⅡはインゼミ大会に参加して熱い議論を。



【 総括 】

北海学園生を対象としたアルバイト調査と『アルバイト白書』づくりは、今年で5年目を迎えた。各種の調査によれば、高学費問題など背景に、大学生の7、8割がアルバイトを経験しているという。本学「学生生活実態調査」でも、授業時間を上回る時間数をアルバイトに費やす者が少なくない。加えて、法律違反などトラブル経験も少なくない。

今年は、例年の聞き取り調査に加えて、コンビニバイトに焦点をあてた取り組み（アンケートや求人情報誌分析）を行った。調査を通じて、コンビニバイトでは、時給額は最低賃金額あるいはプラスαの付近に集中していること、その一方で、商品の販売ノルマ・買い取りや仕事上のミスに対する弁償を求められているといった状況が明らかになった。また、かかる問題の解決方法として、労働法と労働組合を学んだ。詳細は『白書』を参照されたい。

→<http://www.econ.hokkai-s-u.ac.jp/~masanori/index> からダウンロード可

なおゼミナールⅡでは、「非正規公務員問題」をテーマに論文を作成し、12月5、6日に新潟大学で開催されたインゼミ大会に参加し、法政大学のゼミと討論を行った。

学生研修記

伊勢亀 保夫
経済学科3年
森高校出身



伊藤 紗瑛
経済学科2年
大森高校出身



労働者の権利を学んだ1年間

私たちはこの1年間、学生アルバイト問題を主軸に、調査研究に取り組んできました。ブラックバイトが疑われるような事態がとても身近に発生していることが調査で明らかになりました。新聞や文献などを読みながら、学生アルバイトや労働法だけでなく、奨学金問題など関連領域の知識を深め、同時に、調査結果の取りまとめ作業を行っていきました。夏期休暇時には、札幌地域労組という労働組合をゼミで訪問し、私たちの調査結果に対して、コメントなどをいただきました。

作業を進めていく過程で、労働者にとって大切な権利をどれだけの若者が理解しているのか疑問に思いました。働き方が問われているこの時代の当事者である学生・若者が無知であることも問題ではないでしょうか。権利を使うか使わないかに関わらず、知ることががなによりも大事なことなのだと思います。

労働実態のイマを知って

文献を読んだり、労働組合の方からお話をお聞きする中で、「ブラックバイト」をはじめとした日本の労働問題や労働法、あるいは、自分が職場でトラブルに遭遇したときの具体的な対処法など、様々なことを学びました。学生バイトについては、北海学園生に聞き取りやアンケートを行い、結果を『白書』にまとめました。法律に違反しているアルバイト先の多さに驚きました。

みなさんの中にも、残業代が支払われない、ノルマが課される、レジの違算を給料から天引きされる、などの経験をした人がいるのではないのでしょうか？

アルバイトをしている今も就職した将来も、働いていても何かおかしいと感じたら、労働組合や労働基準監督署などの専門家に相談するという道もあることを知りました。私たちが作成した『アルバイト白書』が働くことについて考えるきっかけになれば嬉しく思います。



小坂直人ゼミI・II

参加学生数 15人



小坂 直人

経済学科
教授

地層処分研究とメガソーラー

研修地：幌延町・稚内市

【 研修目的 】

放射性廃棄物の最終処分をめぐる国民的議論が始まっている。幌延深地層研究センターは、政府が推進する地層処分方式を検証するための施設である。私たちは、文献学習だけでは理解が難しい地層処分の方法について実際に地下350メートルまで下り、研究の現況を実体験しながら学習することとした。

研修地・日程

9月1日 幌延町、幌延深地層研究センター
9月2日 稚内市、稚内メガソーラー発電所



2



3



4



5



6

【 総括 】

2011年3月11日は、「大きな地震・津波と深刻な原発事故」のあった日と記憶に留めるだけでは済まない、根底的な問題をわれわれに提起しているようである。この震災と原発事故以降、自然エネルギーがブームとなっている。原発立地地域のみならず、全国、いや全世界において、原子力エネルギーの利用のありかたについて原点に戻って考え直す気運が高まっている。原子力や化石エネルギーに全面的に頼ることのないソフト・エネルギー社会を構築することによって、根本的なシステム変換が求められているのが現在のわれわれの歴史的な立ち位置なのかもしれない。しかしながら、この道も容易であるわけではない。われわれは、北海道の自然エネルギー開発の動向を探るために、先進地域の一つ稚内市のメガソーラー施設と風力発電施設を訪問し、その実態を学んだ。自然エネルギーは、その名の通り「自然条件」によって大きく結果が左右される。積雪寒冷地である稚内市のソーラー施設では、パネルの角度、設置地面での貝殻散布、そして蓄電設備による電力調節等の工夫に関係者の努力を見た思いである。また、幌延の膨大な研究施設と大がかりの実験設備のありように、政府が地層処分に並々ならぬ意欲を示していることを改めて感じた。地下350メートルに降りての見学は、高レベル核廃棄物の処分がいかに困難な作業であるかを実感できるものであった。



1

学生研修記

田中 滉貴

経済学科3年
北海道高校出身

橋田 弘毅

経済学科3年
北広島高校出身

幌延と稚内の研修を終えて

今回私たちのゼミは高レベル放射性廃棄物の地層処分研究の現状や深地層研究の必要性、新エネルギーのシンボルとしてのメガソーラーの仕組みを学ぶため、幌延深地層研究センターと稚内メガソーラー発電所を研修訪問した。前者は原子力発電の使用済燃料を再処理するときに発生する高レベル放射性廃棄物を安全に処分する研究を行っており、ガラス固化体で作られた人工バリアと岩盤による天然バリアで組み合わせられた多重バリアで廃棄物を覆い地下へ送り込む方法をとっていた。そして深地層の研究が様々な調査を行う技術の開発、確立に必要であり、今後の地質環境の理解のためにもいかに重要であるかが分かった。一方、後者は約28500枚ものパネルを保持しており、パネルには種類が5つも存在することが分かった。白いホタテの貝殻を利用し発電量増量の補助に利用するという面白い工夫も為されていた。

幌延深地層研究センターと稚内市メガソーラー

僕たち小坂ゼミIIは、1泊2日で幌延町深地層研究センターと稚内市メガソーラー発電所を訪れました。

深地層研究センターでは、高レベル放射性廃棄物を安全に処理するための地層処分技術に関する研究開発が行われています。施設内では、地下施設内部の様子をリアルタイムで見ることができるモニターがありましたが、僕たちは実際に地下350メートルの深さまで降り、作業の様子を見ることができました。

稚内市メガソーラー発電所では、間近に多くのソーラーパネルを見ることができました。ただ置いておくだけで電力が供給されると思っていましたが、冬場になるとパネルに雪が積もったりすることもあり、その除雪にいろいろ工夫をこらしていることなども聞くことができました。地域研修を通して、北海道内の自然エネルギーに関する可能性に大きな期待を持つことができました。これからのゼミでは、この自然エネルギーとともに、放射性廃棄物についてもさらに理解を深めたいと思います。

写真キャプション ① 稚内市風力発電機前で。② 深地層研究センター、事前説明。③ 深地層研究センター、展示説明。④ 地下行エレベーターを待つ。⑤ 地下350mで。⑥ 稚内市メガソーラーを前に。

佐藤信ゼミ I

参加学生数13人



佐藤 信

地域経済学科
教授



室蘭市のまちづくりの特徴を調べる

研修地：室蘭市

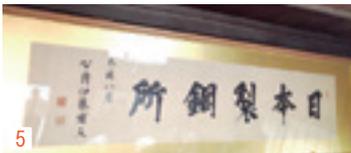
【 研修目的 】

観光を通じたまちづくりが北海道内各地で行われている。本研修では、室蘭市における観光振興の工夫・特徴をヒアリングするとともに、NPO法人や日本製鋼所等を訪問し、これからの室蘭市のまちづくりを支える産業の可能性を明らかにすることを目的とした。

研修地・日程

8月25日	日本製鋼所 室蘭市役所観光課 道の駅「みたら室蘭」 NPO法人「テツプロ」
8月26日	日本製鋼所 登別地獄谷

写真キャプション ① 道の駅に展示している巨大ボルタ人形。② 室蘭市役所観光課でのヒアリング。③ 白鳥大橋全景。④ テツプロでの体験学習。⑤ 公爵・伊藤博文による書。⑥ 鍛刀所。



【 総括 】

室蘭市は鉄のまちとして知られているが、産業構造の大きな転換もあり人口減少が続いている。こうした中で、室蘭市は現在どのようなまちづくりの取り組みを行っているのか。本ゼミでは、以上の問題意識をもって室蘭市を訪問した。

訪問先の市役所観光課においては、坂の多い地形を活かして映画やドラマの撮影場所として室蘭が人気を博していること、数多くの夜景スポットがあり、工場夜景を海から見学するためのナイトクルージングも行われていることが分かった。反面、観光スポットが分散しており集客拠点が必要であること、海外の観光客も呼びこもうとしているが途上であることも浮き彫りとなった。

続いて訪問したNPO法人テツプロでの工房体験やインタビューを通して、体験学習の対象がまだ限定的であり、「鉄」を活かした取り組みは拡大余地があると思われた。2日目の日本製鋼所においては、工場とともに迎賓館や鍛刀所の視察も行ったが、一般観光客へは非公開とのことで、観光とは別個の存在であることが印象的であった。

観光課でのヒアリング中に本学卒業生が参加し、公務員の仕事について熱心に説明してくれた。ゼミ生は、観光振興へ取り組む市役所職員はじめ関係者の思いを学んだことと思う。



学生研修記

吉川 祥平

地域経済学科2年
札幌平岸高校出身



平山 康貴

地域経済学科2年
千歳北陽高校出身



地域研修で学んだこと

私たちは室蘭市のまちづくりの特徴を調べるというテーマのもと1泊2日の地域研修に行きました。

まず1日目に室蘭市役所、道の駅、NPO法人「テツプロ」へ行きました。室蘭は第2次産業が盛んで、工場などの夜景を生かしたナイトクルージングやバスツアーなど、夜景に絡めたまちづくりをしているという特徴があります。中でも測量山は市民の寄付でライトアップしているので、自分たちの力によるまちづくりの象徴になっています。また多言語への対応や設備などの受け入れ体制への課題を教えてもらいました。2日目は日本製鋼所で工場見学を行いました。終戦まではアジア最大だったという工場の設備を見学し、施設中にある瑞泉閣や瑞泉鍛刀所では、伊藤博文の書など歴史的な文物を見学してきました。

実際にこの目でみて、話を聞くことで室蘭のまちづくりの工夫や課題を知ることができた良い研修になりました。

室蘭市のまちづくり

私たちは室蘭市のまちづくりの特徴を調べることをテーマに研修を行いました。まず初日に室蘭市役所観光課を訪問し、観光を通じたまちづくりについてヒアリング調査を行いました。調査の結果、工場や測量山、白鳥大橋などがライトアップされた綺麗な景色が観光振興のキーポイントの一つであることがわかりました。また、室蘭市内を実際に回って気づくシャッター通りや坂道。一見良い印象ではありませんが、最近では映画のロケーションの場所として室蘭に人気があり、こうした要因もまちの活性化につながっているということがわかりました。2日目は日本製鋼所を視察してきました。ここでしか製造していない原子炉の容器があり、外国に輸出しているそうです。また敷地内の瑞泉閣や鍛刀所も視察し、室蘭の歴史に触れることができました。

今回の研修では室蘭市の観光を通じたまちづくりのポイントが景色やロケーションであることがわかり、今後さらに伸びていくところだと感じました。また、室蘭の歴史に触れることができたので大変有意義な研修となりました。

佐藤信ゼミ II

参加学生数 10人



佐藤 信

地域経済学科
教授

旭川市における大型小売店の出店と買物公園

研修地：旭川市

【 研修目的 】

旭川市は道北の中心都市であり、古くから駅前商店街（買物公園）がつけられたことでも知られている。2015年、駅前商店街のごく近くに大型小売店が出店した。本研修は、それによる商店街の変化や対応をインタビューやアンケート調査によって明らかにすることである。

研修地・日程

- 9月15日 イオンモール視察
平和通商店街振興組合
まちなかマネジメント協議会
- 9月16日 買物公園にてアンケート調査
トクノ靴店インタビュー

写真キャプション ① 旭川駅に直結したモール。
② 旭川駅に向かうゼミ生。③ 平和通商店街振興組合でのヒアリング。④ まちなかマネジメント協議会でのインタビュー。⑤ 買物公園内のビルでは旭川市のキャラクターグッズも販売。⑥ トクノ靴店で話を伺う。



【 総括 】

中心市街地への大型小売店の出店、それによる地元商店街への影響は全国的な問題となっている。旭川市においても、旭川駅直結のショッピングモールが今年3月にオープンした。

ゼミでは当初、地元買物公園への大きな影響があると考えていたが、実際に旭川市を訪問し、ヒアリング調査等を行った結果、当初の予想とは異なった成果を得た。例えば、大型小売店の出店によって全ての専門店が打撃を受けているのではなく、大型小売店への来客者が、専門店に立ち寄るようになる等の変化が見られる（T靴店でのインタビュー）。また、アンケートの回答者の多くは地元住民であったが、イオンモール出店後であっても、買物公園での利用はそれほど減少していない。

今後、駅から離れた買物公園の奥側で、イベントを通して来客を増やすとともに、個々の専門店が他店とは異なった独自性を発揮することが求められる。

ゼミIIの学生たちは、事前の文献学習と質問項目の準備、グループごとに設定した当日のテーマに沿って、現地での研修に臨んだ。昨年に引き続き、街頭インタビューを行ったが、多くの学生は物怖じせずに対象者に話しかけているようであった。1年間の成長が感じられた研修であった。

学生研修記

安藤 優花

地域経済学科3年
北海学園札幌高校出身

佐々木 一真

地域経済学科3年
岩見沢緑陵高校出身

旭川市における大型小売店の出店と買物公園

旭川市の駅前商店街は全国的に知られていますが、今年、買物公園の近くに大型小売店が出店しました。私たちのゼミは、出店後の駅前商店街の変化や課題を明らかにするために、平和通商店街振興組合などを訪問し、買物公園の現状について調査を行いました。

その結果、イオンモール出店後の買物公園への買物客は、昨年同時期に比べると駅の近くでは増加したそうです。しかし、奥に行くほど買物客が減少することから、様々なイベントを行い、集客力を高める努力をしていることがわかりました。

2日目は、買物公園のベンチに座っている人々を中心に、アンケート調査を行いました。大型小売店の出店後は、駅前商店街の雰囲気も変化し、まちが賑やかになったなどの回答もありました。今回、旭川市の歴史やまちの変化を知ることができ、様々な人々と出会い、大変有意義な研修となりました。

地域研修を終えて

佐藤ゼミIIの地域研修では、今年3月駅前にイオンが出店したことによる買物公園への影響について調査するため旭川市を訪問しました。初日は実際にイオンに立ち寄り視察した後、平和通商店街振興組合でヒアリングを行いました。

2日目は3つのグループに分かれ、買物公園にいる消費者にそれぞれアンケート調査を行いました。直接消費者にアンケートを行うことで率直な考えを聞くことができ、良い調査が出来たと思います。私のグループは消費者へのアンケートと一緒に事前にインタビューを依頼していた靴屋さんを訪ね、お話を聞かせていただきました。インタビューでは、自身のお店でのこだわり、特徴、お店に来る消費者の客層やイオンが出店する直前と、出店した後の様子や影響を、商店街で実際にお店を営んでいる人ならではの目線で聞くことができました。2日間の地域研修でしたが貴重なお話をたくさん聞くことができたと思います。



徐涛ゼミⅠ・Ⅱ

参加学生数14人



徐 涛
地域経済学科
教授



外国人観光客誘致の実態調査：上川町・層雲峡温泉

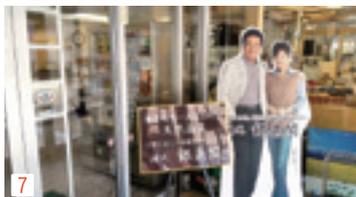
研修地：上川町

【 研修目的 】

外国人観光客誘致の現状と課題を調査してきたが、今年を上川町・層雲峡温泉で研修を実施した。

研修地・日程

8月28日	町内見学 上川町役場にて、産業経済課課長補佐・高橋良弘さん、層雲峡温泉観光協会専務理事矢戸重之さんより外国人観光客誘致事業紹介・質疑応答 温泉街見学
8月29日	大雪森のガーデン実地調査



【 総括 】

昨年は洞爺湖町で調査したが、洞爺湖温泉観光協会の佐々木清志事務局長の振る舞いからは、大きな経済効果を有する外国人観光客を「ゆうこう」（友好→有効）に利用する気はあるのか、と疑問を持たざるを得なかった。

層雲峡温泉では氷瀑祭りが実施されており、そのため、一般に冬の閑散期においても観光客が集まる。氷瀑祭りが現在に至るまでの経緯について詳細に説明していただいた。外国人観光客は台湾が中心であるが、なぜ同様な気候条件・経済発展段階を有する香港、シンガポール、中国広東などからの観光客が目立たないのかは、おそらく歴史・民間交流などの背景が存在するが、このことはこれからのインバウンドが伸びる余地を実感させた。

気になるのは、繁忙期と閑散期が比較的に平準化された層雲峡温泉においても、やはり外国人よりも減り続ける日本人観光客が好まれることである。その理由は政治問題によるインバウンドの不安定性とマナー問題だと解釈される傾向があるが、観光統計をみると、前者は一過性の現象であり、後者は問題というよりも文化・習慣であろう。ちなみに、我々が泊まる旅館では大声で話したり、私の貸し切り風呂に無断に入ったりする男もいたが、外国人は私だけであった。

上川町の「町民憲章」では「旅行者をあたたく迎えます」と書いてあるが、ぜひこのような友好的姿勢をもって来日客の資源をさらに有効に活かしてほしい。



学生研修記



及川 成就
地域経済学科2年
大麻高校出身



島崎 篤也
地域経済学科3年
旭川西高校出身

外国人観光客の視点で

私たち徐ゼミでは上川町で地域研修を行いました。役所と観光協会の方に話を伺いました。上川町では外国人観光客の誘致対策として現地に出向き、プロモーションを行っているようです。宿泊施設では電波の工事を行い、ロビーではWi-Fiが使えるようになりました。現状として外国人との言葉の壁が問題であり、将来的にはタブレットを使った対策を計画していると聞きました。

2日目には「大雪森のガーデン」を散策しました。じっくり中を見て回ったのですが、看板の標記は小さく英語でしか書かれておらず、また電波が届きにくいことなど不便に感じました。

もし私が外国人観光客だったら層雲峡は別の観光地に向かうための中継地としか感じられませんでした。「氷瀑祭り」以外にもっと他の観光資源や特産品をアピールしたらいいのではないかと思います。

観光客を増やすには？

上川町の方のお話の中で私が印象に残ったのは、「外国人観光客の求めていること」という点です。

私が驚いたのは、外国人観光客にとって層雲峡は「観光」ではなく「一泊目の宿泊場所」という点でした。千歳空港からの観光客が一泊目の宿泊場所として丁度いい立地にあるのが理由だそうです。私は数回層雲峡に宿泊しましたが、全く気が付きませんでした。外国人観光客が増加するにつれ、ホテル館内のWifi環境の整備などの要望も出てきています。また氷瀑祭りにも、台湾から協賛金や造形の要望が来るなど、層雲峡には様々な要望があるようです。

上川町はPR活動を精力的に行っています。台湾からの観光客が特に多く、年々増え続けている状況ですが、世界一の人口を誇る中国からの観光客はまだ多くはありません。これから外国人観光客を増やすには観光客の要望に応えるのも重要だと思いました。

写真キャプション ① 大雪森のガーデン。② 町民憲章。③ 観光協会窓口。④ 上川町聞き取り調査。⑤ 上川町インバウンド紹介。⑥ 学生質問。⑦ 層雲峡温泉の旅館。

中園桐代ゼミⅠ・Ⅱ

参加学生数11人



中園 桐代

地域経済学科
教授

母子家庭の現状と子どもの教育・学校外活動について

研修地：札幌市・日高町

【 研修目的 】

札幌母子寡婦福祉連合会（以下、札母連）の主催する「ひとり親家庭ふれあい日高自然キャンプ」に学生ボランティアとして参加することによって、札幌市の母子家庭の抱える課題や子どもの養育に関する課題を理解し、また学生としてどのように支援するのかを考える。

研修地・日程

7月18日	ひとり親家庭 ふれあい日高自然キャンプ（国立日高青少年自然の家）
7月19日	ひとり親家庭 ふれあい日高自然キャンプ（国立日高青少年自然の家）

【 総括 】

今年の地域研修はボランティア活動を行うという、見学旅行とは違った方法で行った。大勢の学生を一括して受け入れてくれた札母連にお礼を申し上げる。

学生の中には知らない人（特に年齢が上の女性と子ども）の輪に入って行くことが苦手な人もいたと思うが、それぞれの班でラフティングや野外炊飯、オリエンテーリング等子どもたちをリードしてくれ、事故もなく2日間の日程を終えられた事は本当によかったと思う。子どもたちも学生のことが気に入ってくれたようで、キャンプ終了後ラブレター(?)をもらった学生もいた。

また、参加した母親35名に全員に学校外での塾やスポーツ活動についてアンケートを行う事ができた。これは私にとっても非常に興味深いものであった。子どもの貧困がマスメディアで報じられ政治的な 이슈にもなっているが、進学率等の統計ばかりが議論されていて、スポーツ活動についてはほとんど手が付けられていないからである。結果としては、やはりひとり親世帯の子どもは、他の世帯に比べれば学校外活動の経済的負担が大きく、できることが限られている事がわかった。また、スポーツ活動の中でも送迎のある水泳に人気がある事も分かった。経済的な負担と送迎等の親の負担の双方から、子どものできる体験が狭められている可能性がある。このような現状だからこそ、札母連が行う親子キャンプは意味が大きい。ひとり親家庭では、なかなか経験できないアウトドア活動を行う事は、子どもの経験を広げるだけでなく、母親にとっても重要な体験となっている。

このような活動を学生を含めた地域全体で支えて行く事が重要である事を学生も学ぶ事ができた意義は大きかった。

学生研修記

高橋 太一

地域経済学科 2年
伊達緑丘高校出身

辻 尚弥

地域経済学科 3年
北海高校出身

写真キャプション ① キャンプファイヤー。② ラフティング。③ オリエンテーリング。



地域研修を通して

私が所属する中園ゼミは「母子家庭の子供のスポーツ活動について」をテーマに今回は札幌市母子寡婦福祉連合会が主催のキャンプに学生ボランティアという形で日高町に地域研修して来ました。キャンプでは、ラフティングやキャンプファイヤーなど普段中々できない貴重な体験を母子家庭の親と子供と一緒にすることができました。どの子供もとても無邪気なひとり親家庭の子供だということを感じさせない子供ばかりでした。

キャンプの中で母親の方々に子供のスポーツ活動についてのアンケートを実施したのですが、スポーツ活動をしている子供は約5割ほどでした。この割合を増やしていくためには、地域コミュニティーの形成や母子家庭の扶養手当を増やすなどしていく必要があると感じました。今回の地域研修では母子家庭の皆さんの明るい雰囲気と厳しい現状を知ることができました。

夏といたら日高でしょ

僕たちは、今回研修テーマの母子家庭の貧困と札母連の活動ということで、7月18日、19日に行われた札母連主催の日高キャンプに学生ボランティアとして参加してきました。内容は子どもたちとラフティングをしたり、バーベキューをしたりと普段経験できないことを体験してきました。子どもたちは大変かわいい子たちばかりで、子どもより僕らのほうが楽しんでたのかもしれない。

札母連という団体は、札幌市内における母子家庭の生活の安定を図るためにあります。母親が就職できるように資格を取るための研修会を開いたり、就職の相談も行っています。子どものための無料学習塾も札幌市の全区で行っています。この他にも様々な活動を行っているの、興味がある人はHPを見て下さい。そして今回この研修を通して、母子家庭ならではの悩みなどはたくさんありましたが、子どもたちの元気な姿を見ると、みんな幸せそうでお母さん方もたくさん楽しんでいました。ぼくは母子家庭など関係ないと思いましたが、日高は最高の場所でした。

西村宣彦ゼミⅠ・Ⅱ

参加学生数 28人



西村 宣彦

地域経済学科
准教授



世界自然遺産登録10年の知床・羅臼の現状と課題

研修地：羅臼町

【 研修目的 】

ユネスコ世界自然遺産に登録されて今年で丸10年が経過した知床・羅臼町において、世界遺産登録の意義・効果及び課題を探るために、自然保護、漁業、水産加工、観光、行政など、地域の様々な立場の方々から話を伺った。あわせて北方領土問題に関する学習を行った。

研修地・日程

- 8月25日 羅臼ビジターセンター見学、知床財団ヒアリング、反省ミーティング
- 8月26日 ホエール・ウォッチング（回後島洋上視察）、水産加工業者3社聞き取り調査（川口水産、西家商店、羅臼海産）、羅臼漁業協同組合ヒアリング、漁業者6名聞き取り調査（芦崎さん、浜屋さん、官代さん、釣さん、井田さん、相木さん）、海洋深層水取水施設（二階建漁港）視察、反省ミーティング
- 8月27日 昆布倉庫・市場セリ見学、羅臼町役場ヒアリング、羅臼観光協会ヒアリング、北方領土元島民（語り部）からの聞き取り、小野建設工業敷地内にてBBQ
- 8月28日 クルーズ船「にっぽん丸」乗客歓迎行事の手伝い、まとめのゼミ

写真キャプション ① 漁業者ヒアリング（お宅訪問）。② 漁協市場セリ見学。③ 羅臼町観光協会ヒアリング。④ 北方領土語り部の話を聴く。⑤ 小野君家でBBQ。⑥⑦ にっぽん丸歓迎行事のお手伝い（⑥ラウフィッシャーとともに）。



【 総括 】

世界遺産登録から10年が経過し、羅臼町では町民の誇りである豊かな自然を次世代へと引き継ぐために、「自然の保護と利用のバランス」を目指し、手探りで模索を続けている。観光面では一時的な観光ブームは過ぎ去り、観光入り込み客数は減少傾向となっているが、ホエール・ウォッチングなどの自然体験やエコツーリズム・産業観光といった、世界遺産のマチらしい新たな観光スタイルが着実に広がっている。漁業面では海洋生態系の保護を目的とした規制強化といった直接の影響は受けなかったものの、ロシアの大型トロール漁船による乱獲、トドによる被害、地球温暖化等に起因すると考えられる漁獲減に直面し苦しい状況にある。羅臼沖の海における持続可能な漁業と恒久平和を実現するためにも、政府はロシアと粘り強い姿勢で外交交渉に臨むことが求められるが、羅臼でも危機感をバネとして、羅臼昆布の海外への売り込みや、漁業と観光の垣根を越えた連携・協力など、民間主体の地域づくりの胎動を感じる事ができた。受け入れて頂いた羅臼の皆様から感謝申し上げたい。また本研修は北方領土隣接地域振興対策根室管内市町連絡協議会より北方領土学習に関する助成を受けた。記して感謝申し上げたい。

学生研修記

中濱 花名子
地域経済学科2年
函館城北高校出身



生命の神秘を感じた知床・羅臼の豊かな海

私たちは世界自然遺産登録10年目を迎える知床・羅臼町に行ってきました。聞き取りなどの調査をしていく中で、ロシアのトロール船による乱獲、漁場を荒らすトドによる漁獲量の減少、後継者問題などに悩む羅臼の現状が見えてきました。しかし多くの課題を抱えながらも漁師や漁業者の方達からは、ひたむきに生きる力強さを感じました。ホエール・ウォッチングでは初めて生で鯨を見ることができ、本当に感動しました。生命の神秘を感じて、ずっと見ていたいと思いました。自然豊かな羅臼をこの目でしっかりと感じる事ができました。羅臼では自然を利用した観光が盛んですが、動物の人馴れが問題視されるなど、観光業でも保護と利用の両立への模索が続いています。難しい問題ですが、地域全体が危機感を持ち、自然保護、漁業、観光のどれにも力を入れて取り組んでいく必要があると感じました。

本田 浩平
地域経済学科3年
帯広三条高校出身



世界遺産登録から10年、次の10年に向けて

世界自然遺産登録10年を迎えた知床・羅臼町の現状と課題を調査し、持続可能な地域づくりを考えるのが今回の研修テーマでした。ロシアのトロール船問題やトドの駆除問題など、様々な課題が見えてくる中で、実際に足を運んで感じたのは「自然の保護と利用の両立」の難しさでした。しかし羅臼町のような人口6,000人くらいの規模の町は、お互いの顔が見え、協働のまちづくりを進めていくには最適な単位で、素晴らしい財産を持っているとも感じました。羅臼の海は海洋深層水が湧昇し、質のよい魚や昆布などの海産物が育まれています。羅臼の海と山は町民の誇りで、いわば海と陸が一丸となって羅臼の産業が支えられていると言っても過言ではありません。他の地域にはない魅力をつつ羅臼町を、知り合いにもたくさん発信していきたいと私は強く思いました。

平野研ゼミ I・II

参加学生数 25 人



平野 研
地域経済学科
准教授



名古屋市フェアトレードタウン宣言の過程とその可能性

研修地：愛知県名古屋市

【 研修目的 】

2015年9月、アジア2番目となるフェアトレードタウン宣言を達成した名古屋の取り組みについて、市民運動、行政、企業など多様な側面から調査を行った。フェアトレードに関する事前学習を基に、現地でのインタビュー調査とアンケート調査を実施した。

研修地・日程

- 9月17日 名古屋市環境局インタビュー
名古屋市議会議員インタビュー
フェアトレード推進団体インタビュー (ICAN、中部フェアトレード振興協会、なふたうん)
- 9月18日 店舗、公共施設などへのインタビュー調査
6チームで25カ所を調査
- 9月9日 フェアトレードタウン認定式見学
街頭アンケート調査
環境デーなどや見学
- 11月12日 フェアトレード名古屋ネットワーク代表へのWebインタビュー

【 総括 】

名古屋のフェアトレードタウン運動の特徴は、「環境」「多様性」「ネットワーク化」というキーワードで捉えられる。フェアトレードは国際支援活動とリンクすることが多いが、名古屋ではそれだけでなく「環境」と深く結びついていた。藤前干潟保全運動から始まり、愛知万博、COP10、ESD国際会議といった国際的なイベントを通じて、国際理解と「環境」問題意識とが結びつき、消費者運動や市民運動が展開されてきた。フェアトレードも「環境」とリンクすることで受け入れられやすくなり、それは社会福祉や町おこしなどとの更なるリンクを生み出していった。このように生み出された「多様性」は、その担い手も多様である。市民団体やフェアトレードショップはもとより、高校の部活動、大企業のCSR、歯科医院など、各々の立場からフェアトレードに関わっている。この「多様性」は「ネットワーク化」しており、様々な相乗効果を生み出している。フェアトレードタウン自体が、自治体ぐるみでフェアトレードの推進を掲げるものであるから、行政をも巻き込んでそのネットワークは拡大してきた。今後ますます拡大していく可能性を、今回の調査では見出した。そして、報告書作成などを通じて北海道でのこのような取組の可能性についても考察していった。

学生研修記



青木 泰樹
地域経済学科 2年
旭川凌雲高校出身

若者が支える名古屋市のフェアトレード運動

私たちは、名古屋市がフェアトレードタウンに認定される日に合わせて、地域研修に行きました。名古屋市では、障害者の就労応援や環境保全などの市民運動や NGO 団体とフェアトレード運動とが結び付いており、多様性を強く感じました。さらに名古屋市の特徴としては、中高生などの若い年代の参加がありました。彼らはフェアトレード商品を扱った出店をイベント時に出していたり、商品を独自開発したり、と意識の高さがうかがえました。このことから、北海道での展開のためには、まずイベントや雑誌などで情報を拡散すること、そして次に、地域にあった取り組みのネットワークの創出が不可欠だと感じました。それには高校・大学の若い世代の参加が重要です。

本研修の成果を活かして、世界フェアトレード月間である5月には、北海学園大学でもキャンペーンを取り組んでいこうと考えています。



町野 啓太
地域経済学科 3年
北海高校出身

地域活性化と名古屋フェアトレード運動

平野ゼミでは、フェアトレードタウン宣言を達成した名古屋市で、アンケートを行いました。その結果、全国のフェアトレード認知度と比べて、名古屋のフェアトレード認知度は高く、驚くとともに、長年に渡りフェアトレード活動を積み重ねてきた成果だと感じました。実際に現地インタビューでは、市民や商店だけでなく、政治家、公共機関などでも話を聞きました。そこからは、熱意や、本気度が非常に伝わってきました。これは、昨年の陸別町のフェアトレード調査と共通するものでした。地域活性化とフェアトレードとが結びついているという意味で、フェアトレードが街の発展に繋がっているといえます。陸別町や北海道のフェアトレードタウン運動について考えるきっかけとなり、有意義な調査でした。

この調査の成果は論文にまとめ、「北海道フェアトレード大学」という市民講座でも報告を行いました。

写真キャプション ① ショップインタビュー。② 名古屋市議会議員インタビュー。③ ICANインタビュー。④⑤ アンケート調査。⑥ 会計事務所インタビュー。



古林英一ゼミ I

参加学生数 12 人



古林 英一
地域経済学科
教授



サケ漁業と地域 HACCP の取組

研修地：標津町

【 研修目的 】

サケは国際的な商品であるとともに、北海道水産業を支える重要な漁業である。標津町ではサケの品質向上による価格の維持・向上をめざし、生産・加工・流通にわたって、地域ぐるみの衛生管理をおこなっている(地域HACCP)。本研修では、サケの生態・漁労・加工にわたり、実際の作業を体験しながら、北海道の重要な地域特産物であるサケ漁業と地域HACCPの取組を理解することを目的としている。

研修地・日程

10月1日	標津サーモン科学館
10月2日	マ印神内商店、笹谷商店、サーモン科学館
10月3日	水揚げ見学



【 総括 】

本学の学生の殆どは道内出身であるにも関わらず、サケの遡上すら見たことのない学生が大部分である。また、魚をさばいたことのある学生もわずかである。

本研修では、マ印神内商店で、なじみ深い製品であるイクラの製造工程を見学し、実際に作業の一部を体験させてもらうことで、現代の水産加工業の実態と衛生管理の重要性を理解できたと思われる。また、笹谷商店では新巻鮭の製造をおこない、サケの加工についても学べた。また、標津サーモン科学館では、町役場水産課の担当職員から、地域HACCP導入の経緯や地域HACCP導入によってもたらされた効果を学び、サーモン科学館館長からサケの生態や生物的特性などについて、解剖実習を交えて学習した。当初は定置漁業の網起こし作業に同行させてもらう予定が、漁協側の都合により、乗船ができなかったことは残念であったものの、水揚げ作業を見学し、漁港内での作業でも衛生管理に細心の注意が払われていることを実際に見聞できた。

北海道を代表する産品であるサケを、単なる知識としてだけでなく、自らの体験として学んだことは、将来、様々なところで活躍するであろう学生たちにとって、得がたい経験になったと思われる。

学生研修記

西澤 まどか
地域経済学科2年
札幌新川高校出身



標津町でサケを学んで

私は今回標津町に行ってサケを初めて見て色々な経験をしてきました。サーモン科学館では地域HACCPとは何か、なぜ地域HACCPを実施することになったのかを学びました。神内商店へ行き加工場に入るまでに消毒やコロコロ、また、漁港では鳥害対策のための断熱シートなど、地域HACCPに基づいた徹底された衛生管理を見ることができました。サケの人工授精体験では卵の重さを量り、卵にオスのサケのお腹を押して精子をかけ、時間をおくとサケの受精卵がかたくなって実際に触れることでより理解が深まりました。新巻鮭づくりとは、サケのお腹を切って内臓を取り出し、よく洗った後に塩をすりこむというものです。後日、自宅で自分でつくった新巻鮭を食べるという貴重な体験も出来ました。

写真キャプション ① 夕食。②③ 神内商店。④ 史跡公園。⑤⑥ サーマン科学館での解剖実習・採卵体験。⑦ 標津漁港でのセリ。

田野 和行
地域経済学科2年
千歳高校出身



標津町とサケ

私たち古林ゼミIは、10月1日から10月3日にかけて、北海道の東部にある標津町に、北海道を代表する食べ物である鮭がどのようにして、標津町の産業と関わっているのかを学んできました。

標津町は、酪農と漁業が主な産業で、漁業では、ホタテなどの貝類や鮭などがとれます。私たちは、標津サーモン科学館という所で役場の人から標津町で行われている、地域HACCPと呼ばれる、地域全体で実施している衛生管理がなぜ行われるようになり、現在どのような形で進んでいるのかを説明していただいたり、鮭の身体の仕組みを知るために鮭の解剖をして、鮭の脳はとても小さいがその脳で自分が生まれた川まで戻ることができることや、普段体験することのない鮭の人工授精体験をさせてもらっていただき、自分たちだけではまずできない様々な体験を行うことができたと感じる。この経験はいつかせられるかわからないがいずれ将来生きてくる研修だと思いました。



古林英一ゼミ II

参加学生数12人



古林 英一

地域経済学科
教授



日高地方における軽種馬の生産・育成・流通

研修地：浦河町・新ひだか町・様似町・日高町

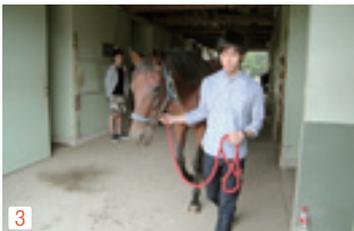
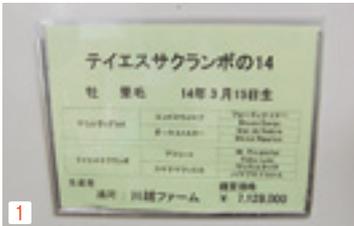
【 研修目的 】

サラブレッドは北海道の地域特産物であり、日高地方はサラブレッドの生産地としては世界有数の規模をほこる。生産牧場で生まれたサラブレッドは、育成・調教過程を経て、競馬で供用され、さらに繁殖馬として牧場に戻ったり、乗馬として供用される。この研修ではその全過程を見学・体験することで、北海道ならではの経験を積むことを目的としている。

研修地・日程

9月1日	ボロシリ乗馬クラブ 日高軽種馬農協 北海道市場
9月2日	JRA日高育成牧場 高村牧場（様似） 門別競馬場

写真キャプション ① 馬房の名札(日高育成牧場)。
② 発走練習用ゲート。③ 馬を外に連れ出す。④
ボロ(馬糞)の除去。⑤ 牧場の子馬。⑥ 馬券を買
てみた。⑦ CS放送にゲスト出演。



【 総括 】

北海道が馬の産地であることは大部分の学生が知ってはいるが、産業現場から馬が消えさった時代に生まれ育った彼らの多くは、馬を見たこともなければ触ったこともない。馬だけではなく、牛も含めて大家畜を触ったこともない学生が殆どである。サラブレッドが競走馬として供用されるまでには、育成・調教過程や流通過程が不可欠であり、日高地方にはこうしたインフラストラクチャーが集積し、さらに、生産をサポートする専門農協である日高軽種馬農協も存在する。

本研修においては、今後、全国で活躍するであろう学生が、北海道の地域産業のひとつであるサラブレッドの生産・育成・流通、そして競馬や乗馬といった全過程を身をもって体験し理解することができたと思われる。様似町の高村牧場では、厩舎作業を体験することで、大家畜の飼養が決して簡単なものではないことを実感できたであろうし、ふだんテレビなどでは見ることのできない競馬の裏側で公正競馬確保のために多くの工夫がなされていることも知ったであろう。さらに、乗馬を通じて馬という動物を肌で感じるとともに、引退した馬も産業的に利用されて、おり、生産から、育成・調教、市場、競馬、そして乗馬といった諸産業が有機的に連関していることを理解したであろうと思われる。とかくネット情報に左右されがちな学生たちにとって、単なる情報や映像ではなく、リアルな体験ができたことは有意義であったといえよう。

学生研修記

岩鼻 陽太郎

地域経済学科3年
旭川実業高校出身



日高のサラブレッド

私たち古林ゼミ II は今回、サラブレッドについて学ぶために、サラブレッドの生産、育成で世界的にも有名な日高地方に行ってきました。最初は人の言うことを聞かない馬を、どのようにして人を乗せて競馬場で走れるようになるまでに育てていくのか、また、競馬場で走っていた馬たちはその後どうなるのか、ということについて学んできました。

去年と同じく、このゼミの地域研修の目標は実際に身をもって体験するというので、今回もいろいろな体験をすることができました。馬小屋の掃除や馬の放牧、乗馬や実際に競馬場に行き馬券を買ってレースを観戦することもできました。今回の研修を通して、サラブレッドの生産、育成がいかに大変なことかを知りました。そして、普段生活していてもなかなか経験することができない貴重な体験をすることができてとてもよかったです。

上山 航平

地域経済学科3年
小樽潮陵高校出身



サラブレッドに触れて

私のゼミでは、9月にサラブレッドの生産から利用に至る過程を自ら体験することを目的に馬産地である日高地方へ行きました。そこでは、日高軽種馬農協や JRA 日高育成牧場へ行き、普段目にする事の出来ない馬の競り場や育成、調教施設を見学し、何もかもが初めて見るものばかりで驚きの連続でした。また、実際に高村牧場で馬の餌やりや厩舎の清掃などの体験を通じて、生き物と向き合う生産者の苦労を垣間見ました。乗馬体験では、馬を思うように扱えず大変苦労しましたが、直接馬の体に触れることで馬の息遣いや体温を感じ、犬や猫などの小動物とは違う生き物への畏敬の念を感じました。

研修の最後には、門別競馬場へ行き競馬施設の見学やレースを観戦し、馬券購入体験もしました。この研修を通じて、競走馬に対するイメージが無機質のものから命のある固体へと変化しました。



水野邦彦ゼミ I・II

参加学生数 17人



水野 邦彦
地域経済学科
教授



朝鮮人強制労働の痕跡を訪ねる研修

研修地：幌加内町朱鞠内

【 研修目的 】

朝鮮人労働力が投入された雨竜ダム工事現場、犠牲者が運びこまれた寺、写真や資料の展示館などを訪ね、北海道内でおこなわれた朝鮮人強制労働の実態を学ぶ。

研修地・日程

9月15日 朱鞠内湖・雨竜ダム、
笹の墓標展示館
9月16日 まどか

写真キャプション ① 笹の墓標展示館で歴史的経緯を学ぶ。② 笹の墓標展示館の入り口で。③ 北電のかたに雨竜第一ダムの説明を受ける。④ 雨竜第一ダムの底から上へとひたすら昇る。⑤ 夏でも寒いダム内部から地上に戻る。⑥⑦ そばを初めて打つ。



【 総括 】

朱鞠内では名雨線鉄道工事につづき1939年から朱鞠内湖の雨竜ダム建設工事がおこなわれた。ダム工事には常時2,000人、最大7,000人、延べ600万人の労働者がかかわり、その平均年齢は30歳であったという。ここには朝鮮人も大量に投入され、判明分だけで日本人168人、朝鮮人45人、計213人が死亡したとされるが、朝鮮人死亡者数はいまだ不明確。朝鮮人死亡者の遺体はたいてい林のなかに埋められ、だれがどこに埋まっているのか不明であったが、近年になって遺骨の発掘と返還がつけられている。

研修では、ダム工事の現場であった雨竜第一ダムを訪れ、北電職員のかたに説明いただきつつダム上部と内部を見学した。工事の犠牲者はいったん光顕寺に運びこまれるのが常であったが、この光顕寺が現在「笹の墓標展示館」として公開されており、いまでも身元不明の遺骨や位牌が保存されている。この「笹の墓標展示館」で朱鞠内での朝鮮人労働にかんする説明をおこなうとともに、館内展示物を見た。研修一行は、かつての小学校校舎を改造した宿泊施設「まどか」に泊まり、夜はバーベキュー、翌朝は生産量日本一を誇る幌加内町のそば粉を用いたそば打ち体験をおこなった。

学生研修記

向井 裕季菜
地域経済学科2年
札幌開成高校出身



終わりのなき肉体労働

雨竜ダム堰堤にはたくさんの人間が埋まっているともいわれている。地中に眠る遺体もきれいに埋葬されるわけでもなく、家族のもとに帰ることもなかった。時がたち、熊笹の下からつぎつぎと遺骨が発見され、また家族に返還するために遺骨を発掘する作業がおこなわれた。笹の墓標展示館には韓国の遺族からの直筆の手紙が貼ってあり、これがいちばん印象に残っている。ダム内部の急な階段をひたすら降りてゆくと、ひんやりした空気を感じた。いまほど機械や技術が発達していない時代に命がけで作業した労働者たちは、終わりのなき肉体労働に明け暮れ、ダムの完成を見ることはもちろん、想像すらできなかったのではない。

朱鞠内で朝鮮人強制労働の現場を自分の目で見て多少とも考えはじめることができた。すべては複雑だったが、これからも種々の文献をととして考えをひろげてゆきたい。

八重柏 慧峻
地域経済学科3年
帯広大谷高校出身



国境を越えるタコ部屋重労働の歴史

昨年の月形研修と同様に、朱鞠内でも、なにかの建設のために集められた労働者の苛酷さや深刻さが伝わってきた。集められるのも強制、重労働のうえにまともな食事でもできず、逃げ出すこともできないという、いまでは考えられないことがおこなわれていた。朝鮮人労働者の募集と労働について、国境を越える深い歴史があることを知った。

24時間監視つき拘禁労働であるタコ部屋労働は、粗末な食事と苛酷な長時間労働の毎日で、いま私たちが想像するものをはるかに超えている。病気・暴行などによる死亡者の多くはそのまま埋められ、湖の底に埋まっている遺体もあるという。

ダムの周りや、コンクリートの壁がつづくその内部は、年月を経ても壊れることのない強度で、工事が重労働であったことが感じられた。こうした労働に従事させられていた人々のことを私たちは考える必要があるだろう。



水野谷武志ゼミ I

参加学生数 17人



水野谷 武志

地域経済学科
教授

観光まちづくりの可能性と課題

研修地：浜中町

【 研修目的 】

霧多布湿原ナショナルトラストの取り組みや浜中町の観光政策について関係者と意見交換し、また浜中町のエコツアーを体験することによって、浜中町の観光まちづくりの可能性と課題について理解を深める。

研修地・日程

- 8月25日 移動
8月26日 霧多布湿原センターを訪問し、センター職員による講演
センター職員による霧多布湿原案内バスツアー
エコツアー体験（長靴ツアー：霧多布湿原散策）
8月27日 エコツアー体験（無人島ツアー：ケンボッキ島散策）
エコツアー体験後にツアーガイドの瓜田氏による講演
浜中町役場を訪問し観光協会担当職員による講演・意見交換
8月28日 霧多布湿原センターを再訪問し、センター職員と研修成果についてグループディスカッション
8月29日 移動

写真キャプション ① 霧多布湿原センターでの講演。② 霧多布湿原の木道散策。③ 無人島に行く船に乗り込む。④ 浜中町職員による講演。⑤ 宿で勉強会。⑥ 霧多布湿原センターでグループディスカッション。



1



2



3

【 総括 】

霧多布湿原ナショナルトラストは、浜中町の霧多布湿原を保全するために2000年に設立された認定NPO法人であり、2005年には霧多布湿原のビジターセンターである霧多布湿原センターの指定管理者となり、保全活動の他にも観光やまちづくりなど様々な活動に取り組もうとしていることがわかった。特に、環境を保全しながら湿原をふくめた浜中町の豊かな自然を体験できる各種エコツアーは、観光客を引きつける魅力を備えるとともに、そのツアー料金がツアーに関わる地元住民やセンターの収入となり、地域経済の好循環に結びつく可能性がある。各種のエコツアーの中から「長靴ツアー」と「無人島ツアー」を今回体験し、自然の素晴らしさと楽しさを実感する中で、ツアーガイドの役割が大事であることも実感した。一方で、センター職員との意見交換によって、ツアーの準備やガイドの要員確保は容易ではないのでエコツアーのさらなる充実に課題があることもわかった。また、浜中町役場（観光協会担当者）へのヒアリングとも合わせて考えた結果、町役場と霧多布湿原ナショナルトラストとのさらなる連携強化の実現が浜中町の今後の観光まちづくりにとって1つの鍵となる認識を得ることが出来た。

学生研修記

越後 和磨

地域経済学科 2年
小樽潮陵高校出身

「観光産業」におけるまちづくり

水野谷ゼミでは、「観光まちづくりの可能性と課題」をテーマに調査しました。日本には大都市と呼ばれる、人が多く集まり活性化している地域と、反対に都心部に若者が流れていき、観光客などもこない過疎化している地域があります。その過疎化している地域の打開策として、現在注目されているのが「観光産業」です。私たちは北海道の浜中町を訪問し、調査しました。浜中町にある「霧多布湿原ナショナルトラスト」と呼ばれる、湿原を買い取り保全することを目的としたNPOは、その湿原に残る自然を多くの人に知ってもらうため地域住民と協力したエコツアーを開催し、ツアーを通じ観光客を呼び込んでいます。私たちも体験し、とてもたのしいツアーでした。しかし、冬から春にかけてのツアーが少ないので観光収益の減少が課題となっていました。私たちは浜中町で観光産業の重要性や、地域住民の協力が必要不可欠だということを改めて実感しました。

櫻井 里菜

地域経済学科 2年
東海大学付属第四高校出身

浜中町エコツアー「長靴トレッキング」

私たちは北海道厚岸郡浜中町を訪問し、霧多布湿原センターが行うエコツアーを実際に体験してきました。霧多布湿原センターは、季節ごとにエコツアーや自然体験を行うことで地域との交流をはかり、霧多布湿原のファンを増やす活動を行っています。私たちが実際に体験したエコツアーの一つが長靴トレッキングです。雨具と長靴を履いて、ぬかるんだ湿原の中を歩くという、湿原を体で感じることでできるツアーです。足場が悪く、ズブズブとした湿原を足で感じながら、ガイドさんのお話を聞きつつ、動物の足跡を探したり、鳥の鳴き声を聞いたり、季節の草花を見たり、普段の生活では体験できないことができて、とても記憶に残ったツアーでした。このような自然を体験するツアーは、その場所のことを熟知したガイドさんがいて初めて成立するもので、湿原の魅力を来訪者に伝え、ファンを増やす上でとても重要な役割を果たしていると感じました。



4



5



6

宮入隆ゼミⅠ・Ⅱ

参加学生数 17人



宮入 隆

地域経済学科
准教授



十勝から北海道農業の未来を考える

研修地：芽室町・帯広市・音更町・中札内村

【 研修目的 】

大規模畑作地帯である十勝地域は、生産・販売の両面において道内でも先進的な取り組みが多く存在する。本研修では、十勝地域の農業が現在どのような方向に向かおうとしているのか、農業経営者や農協、企業、そして自治体への聞き取り調査を通して明らかにする。

研修地・日程

- 8月25日 様大野ファーム（芽室町）
JAめむろ直売所「愛菜屋」（芽室町）
- 8月26日 有鈴鹿農園（芽室町）
JAめむろ（芽室町）
- 8月27日 フードバレーとかち推進協議会（帯広市）
株式会社山本忠信商店（音更町）
- 8月28日 花畑牧場（中札内村）

【 総括 】

芽室町では、地域農業の現状と課題について、農業者や農協を事例に調査を行った。農業者の事例は、4,000頭規模で肉用牛を飼養し、飼料の質と土作りにこだわる畜産畑作複合経営と、小麦を中心とした大規模畑作経営（170ha）の2つの経営である。両者に経営形態の相違はあるが、共通点として、6次産業化等により、従来の「原料供給者」という役割を乗り越えた事業展開を目指していること、経営の持続性という観点から、家族経営から企業的経営への転換を図っていること、そして、大規模経営でありながら個別完結ではなく、地域内での組織化や異業種との連携も積極的に進めている点である。農協では、市場環境や地域農業の変化を受けて、加工事業や新規作目の生産振興を進めてきた経緯をうかがった。

帯広市では、オール十勝で展開する「フードバレーとかち」について勉強し、また、音更町では、小豆の輸出事業や小麦の製粉事業に取り組む音更町の農産物集出荷企業を調査した。地域内で農産物の付加価値を高めるために自治体がどのような支援をしているのか、また、農業者との共存関係を深めながら事業展開をすすめる産地企業のあり方など、多面的に勉強する機会となった。

学生研修記

佐藤 那菜

地域経済学科 2年
本別高校出身



高間 悠社

地域経済学科 2年
札幌手稲高校出身



十勝農業から見てきた北海道農業の課題

私たちは芽室町と音更町などに行き、十勝農業の現状と課題をテーマに調査を行いました。実際に現地に出向き、調査を行うことで、生産、加工、販売といった多面的視点から十勝農業の現状を垣間見て、これからの農業の未来について考えることができました。

芽室町では小麦や馬鈴薯などの畑作物目の生産が主ですが、その他にニンニク、アスパラなど多品目の野菜も生産していました。地域と農業者の重要な課題は、労働力の確保・育成であることが分かりました。また、農業者間では組織化や連携を積極的に行い、輪作体系の確立や6次産業化といった高付加価値化のための工夫もされていました。企業や自治体でも、同様に労働力不足に対する不安を抱えており、今後どのように労働力を確保するのが課題となっていました。

広大な土地とその香りに魅せられた十勝調査

私たちは「十勝から北海道農業の未来を考える」というテーマの下で、大規模畑作地域である十勝地方へ地域研修に行きました。

特に芽室町の2つの大規模農業経営の調査が印象に残っています。広大な経営耕地や施設、モンスターの如く巨大な農業機械、さらには大地の香りに圧倒されながらも、教科書からは学ぶことのできない実際の農業経営のことや、新たな技術的な課題を含んだ輪作体系、経営者ではなく労働者が欲しいといった状況など、新たな発見がありました。

今回、経営者、農協、地元企業、自治体のから聞き取り調査をして分かったことは、それぞれが連携し繋がりを持つことで、個別完結せずに更なる経営発展に結びつけようとしていることです。この理念を実現し十勝農業、ひいては北海道農業が更に発展して欲しいと感じました。

写真キャプション ① 大野ファームの牛舎。② 鈴鹿農園のにんにく選果作業。③ JAめむろでの研修。④⑤ 山本忠信商店での小豆選果と集出荷施設見学。⑥ ホテルでの花火大会。



山田誠治ゼミ I

参加学生数12人



山田 誠治

地域経済学科
教授

美瑛町の観光の検証

研修地：美瑛町・富良野市

【 研修目的 】

美瑛町地域を対象に、その観光の魅力がどこにあり、政策課題としている長期滞在観光がどの程度実現し、地域の人達、特に農業との関係はどのように考えられているのか、を観光協会および現地のインタビューをもとに検証し、課題の解決策を提案することが研修目的であった。

研修地・日程

9月14日	大学前出発 ぜるぶの丘見学 3つの美瑛町サイクリングコースでの体験とインタビュー
9月15日	美瑛観光協会事務局長富田敏博さんから説明を受ける。 富田ファームでのインタビュー 富良野でミーティング
9月16日	富良野マルシェ見学 自由行動 大学前到着



【 総括 】

まず、美瑛町を3つのサイクリングコースをたどるようにグループに分かれ、実際に現地の観光スポットを訪問し、観光客や現地の観光業に携わっている人たちからアンケートを採りリアルな声を収集した。

観光客の動向としては、宿泊地は隣接の富良野や旭川が多く、美瑛は典型的な通過型観光地となっていて宿泊者は必ずしも多くなかった。また、美瑛観光協会の富田氏によると、宿泊施設そのものの数も多くないことがその一因であるとの説明を受けた。また、氏によると、通過型の観光自体は、地域の農家との間で、大量の観光客の様々な迷惑行為などもあり、現地としてはいろいろな課題があることも紹介された。

それらの課題に対する解決策として、これからの開発が期待できる「青い池」の環境を整備し、農家との関係を良好なものにするための観光の形態を開発し、その中心に農業との関係改善ができるように収穫した作物をさらに食にまで生かし、滞在や移住者を誘うリノベーションで宿泊・滞在を地を開発することを考案した。学生にとっては現地での情報収集が十分ではない中での提案となり、その現場での検証まで叶うことがなかったが、体験と調査から課題解決を考えるいい機会となったのではないかと。

学生研修記

大西 諄

地域経済学科 2年
札幌光星高校出身

高橋 奈美

地域経済学科 2年
岩見沢東高校出身

富良野・美瑛体験記

僕は、2泊3日というスケジュールで美瑛・富良野を訪れた。その中で3つのサイクリングコースに別れ、各スポットごとにアンケートをとり美瑛・富良野の魅力について調査した。その結果、観光客・地元の人を含むおよそ8割の方々が「景色」と回答した。実際に僕らも自転車で景色を眺めながら各スポットをめぐるが、どの景色も美しく感動するものばかりだった。その後観光協会の富田氏の話聞き、美瑛町の畑一つ一つが農家の人々の技術・努力の結晶であることを学んだ。

改めて美瑛・富良野は世界に誇ることで「景色」があると感じ、最も「北海道らしい景色」だと感じた。

写真キャプション ① 駅前からサイクリングコースの検証。② いろいろなコースで美瑛を堪能。③ 農家の人たちは困っています。④ 美瑛の丘でアンケート調査。⑤ 美瑛町観光協会富田さんからの説明。⑥ 花の美しさは四季折々。⑦ 富田ファームでもアンケート調査

美瑛の今とこれから

山田ゼミは「美瑛の長期型観光の検証、観光と地元住民の関係」を視野に入れて地域研修を行いました。まず、観光客の実態を調べるため、自分たちで観光スポットを回り、アンケートをとりました。その結果、多くの観光客が旭川や札幌に行く「ついで」に立ち寄ったという回答でした。また、観光客の中でも中国人は大きなウエイトを占めていました。

これらについて美瑛観光協会の方にお話しを伺うと長期滞在型は難しく、通過型を重視していくそうです。さらに、美瑛の見どころとも言えるパッチワークの景色は農家の方々の努力のおかげなのですが、観光客のマナーの悪さから農家から不満の声が上がっているようです。今回の地域研修を通して美瑛町はこれからどのように観光客を獲得していくか、観光客のマナーをいかに改善を行うかでより良い北海道の観光地になると思いました。



山田誠治ゼミⅡ

参加学生数16人



山田 誠治

地域経済学科
教授



小さな街の観光ブランド力の背景を探る

研修地：大分県由布市

【 研修目的 】

大分県由布市を対象に、由布院という街がなぜ注目され、観光のブランド力が何から発揮され、その歴史とまちづくりのどこに特徴があるのか、また、近年の課題は何か、について、観光客、地域の人達、市役所商工観光課からのインタビューをもとに検証し、学ぶべき点について考えることが研修目的であった。

研修地・日程

- 10月18日 札幌から福岡空港・由布市へ、由布市街地の見学
- 10月19日 由布市内4か所でのインタビュー（駅前、金鱗湖周辺、商店街A.B）、由布市役所商工観光課生野敏博氏から観光の現状と取組について説明を受ける。
- 10月20日 由布市内見学、福岡市へ移動
- 10月21日 自由行動、福岡空港から札幌へ

写真キャプション ① 湯量が全国二位の温泉。② のんびりした民宿ゆふいんフローラハウス。③ 由布岳をバックに里山の田舎道をゆっくりと。④ 街角で観光客にインタビュー。⑤ 由布市商工観光課生野さんからの解説。⑥ 街並みも残っています。



【 総括 】

まず観光客からのインタビューからは、湯布院が温泉や観光地として有名なのは、朝霧・田舎道・由布岳・星空など、素晴らしい景観に観光客が魅力を感じていることが一番に掲げられ、自然景観のすばらしさは、大型開発に頼らず、自然や景観を残すまちづくりから生まれたことが、由布市商工観光課生野さんからの話からも分かった。

また観光客をどんどん呼び込む、というより、住民のためのまちづくりが徹底され、自然や景観を維持していくことで住みよいまちをつくり、潤いのあるまちづくり条例で街並みや景観を維持し、映画博などイベントが住民の手づくりであることから、住む人にとっていい街であることが魅力につながっていることも理解できた。実際、学生たちが触れ合った人たちは皆さん温かく、そのまちづくりにかける人たちと歴史が魅力につながっていることが実感できたようだ。

ただ、あまりに多い観光客と一部観光通りの俗化に違和感を感じる人たちもおり、ただ利益を追求する外部資本店舗も見られ、由布院らしさが失われていくのでは、という懸念もあるとのことであった。

全体として、由布院がただの観光地ではなく、居心地が良く長く滞在したくなる魅力が、滞在型観光地をつくりだした背景だと理解できたのではないかと。

学生研修記

大澤 美咲

地域経済学科3年
帯広緑陽高校出身



研修を終えて考えたこと

今回地域研修で訪れた湯布院は、かつて各地の温泉地で行われていた大型観光開発に反対し、欧州の温泉保養地をモデルに自然を大切にしながら、かなり長期的な視点で観光や街づくりを行っている地域である。湯布院では長期的な観光計画による街の整備と同時に自然と街が調和するよう、建築物の制限や景観条例なども徹底的に行われている。実際街の中を歩いてみると小さい街ながらもエリアごとに整備されそれぞれに特色があることに驚き、訪れた人が多種多様な過ごし方をできる印象を受けた。

印象に残ったこととして、市役所訪問の際「湯布院の街づくりは観光客がメインではなくあくまで住んでいる人が住みやすい街を作る」という説明を受けた事である。まずは住人が街の良さを実感しそれを観光客に伝えていき、結果としてそれが観光客にも伝わるというのは個人的にかなり意外だと感じた。

渡部 公喜

地域経済学科3年
標津高校出身



守っていくべき風景

湯布院は大分県のほぼ中央に位置している。温泉の湧出量全国2位を誇る、言わずと知れた温泉地である。私たちは観光客へのヒアリングと湯布院役所での研修を行い、湯布院が行っている観光への取り組みとまちの構造を明らかにすることを試みた。

ヒアリングでは温泉に対する満足度がとても高いということが分かり、それと同じくらい景色が素晴らしいという意見も多く聞かれた。また、市役所での研修では、まちとして湯布院の景観を守ってゆくため「潤いのある町づくり条例」を制定して、高い建物を建てさせず景観の保全に努めていることが分かった。私も実際にまちを歩いてみると、由布岳を中心としたまちの周りを取り囲む山々と盆地一面に広がる田園風景をみてどこか懐かしい気持ちになった。湯布院は観光客にもう一度来たい、もっと長居したいと思わせる滞在型観光地としてとても優れていた。



現地報告・発表

●西村ゼミ「インカレねむろ・大学等研究プロジェクト2015研究発表会」

2016.1.23 別海町マルチメディア館

1月23日(土)、「インカレねむろ・大学等研究プロジェクト2015」の研究発表会が別海町で開催されました。インカレねむろは、大学のない根室管内に大学のゼミ合宿を誘致し、学生が地域課題について調査研究を行うことで、地域の活性化を図ることを目的とし、今年で2回目となります。今年は管内で11大学がゼミ合宿を実施し、5校が発表会に参加。本学経済学部からは、西村ゼミが「世界遺産登録から10年の知床・羅臼の現状・課題と持続可能な地域づくり」をテーマにエントリー。地域研修の学習成果をまとめた上で、「ホームステイ型修学旅行」「料理専門学校の設置」「国後島への世界遺産区域の拡大」を提言し、最高賞の「北海道根室振興局長賞」を受賞しました。ゼミを代表して、地域経済学科3年の岩田美津希さん(札幌大谷高校)、大谷香朝さん(室蘭栄高校)、小野丞一郎君(羅臼高校)の3名が発表会に参加しました。夜の懇親会では他大学の学生やサポートの社会人の方々とも積極的に交流し、インカレの醍醐味を満喫しました。



●佐藤ゼミⅡ 現地報告会 2016.2.26 旭川フードテラス

2月26日(金)午後、旭川市平和通商店街(いわゆる駅前買物公園)にある旭川フードテラス2階会議室において現地報告会が行なわれた。インターンシップなどによる不参加者を除き3年生6名が参加。旭川市や旭川商工会議所、旭川平和通商店街振興組合など計8名の関係者を前にして約1時間半にわたって成果報告を行った。質問の中で、商店街が生き残る具体的方法を問われたが、学生たちは「外国人向けのメニュー表」「チャレンジ・テナント」「子供向けイベント」などのアイデアを披露し、反応も上々だった。ゼミレポートで商店街問題を課題とした学生もいたので有益な報告会であった。



北海学園大学 経済学部

地域研修報告書 2015



北海学園大学 経済学部

[経済学科・地域経済学科]

TEL : (011) 841-1161 (内線2222)

<http://hgu.jp/>

<http://econ.hgu.jp/>

2016年3月発行

制作:(株)ラボット